

赤ずきんちゃん (Bruder Grimm)

むかし、むかし、あるところに、ちいちゃいかわいい女の子がありました。それはたれだつて、ちよいとみただけで、かわいくなるこの子でしたが、でも、たれよりもかれよりも、この子のおばあさんほど、この子をおかきがつてゐるものはなく、この子を見ると、なにかもやりたくてやりたくて、いったいなにをやつていいのかわからなくなるくらいでした。それで、あるとき、おばあさんは、赤いびろうどで、この子にずきんをこしらえてやりました。すると、それがまたこの子によく似あうので、もうほかのものは、なんにもかぶらないと、きめてしまいました。そこで、この子は、赤ずきんちゃん、赤ずきんちゃん、とばかり、よばれるようになりました。

ある日、おかあさんは、この子をよんでいいました。

「さあ、ちよいといらっしゃい、赤ずきんちゃん、ここにお菓子^{かし}がひとつと、ぶどう酒^{しゅ}がひとつとあります。これを赤ずきんちゃん、おばあさんのところへもつていらっしゃい。おばあさんは、ご病気でよわつていらっしゃるが、これをあげると、きつと元気になるでしょう。それでは、あつくならないうちにおでかけなさい。それから、そとへでたら気をつけて、おぎょうぎよくしてね、やたらに、しらない横道へかけだしていったりなんかしないですよ。そんなことをして、ころびでもしたら、せつかくのびんはこわれるし、おばあさんにあるものがなくなるからね。それから、おばあさんのおへや

にはいったら、まず、おはようございます、をいうのをわすれずにね。はいると、いきなり、おへやの中をきよろきよろみまわしたりなんかしないでね。」

「そんなこと、あたし、ちゃんとよくしてみせてよ。」と、赤ずきんちゃんは、おかあさんにそういつて、指きりました。

ところで、おばあさんのおうちは、村から半道はなれた森の中にありました。赤ずきんちゃんが森にはいりかけますと、おかみがひよつこりでできました。でも、赤ずきんちゃんはおかみつて、どんなわるいけだものだからりませんでした。それから、べつだん、こわいともおもいませんでした。

「赤ずきんちゃん、こんちは。」と、おかみはいいました。

「ありがとう、おかみちゃん。」

「たいそうはやくから、どちらへ。」

「おばあちゃんのところへいくのよ。」

「前かけの下にもつてゐるものは、なあに。」

「お菓子に、ぶどう酒。おばあさん、ご病気でよわつてゐるでしょう。それでおみまいにもつてつてあげようとおもつて、きのう、おうちで焼いたの。これでおばあさん、しつかりなさるわ。」

「おばあさんのおうちはどこさ、赤ずきんちゃん。」

「これからまた、八、九町^{ちやう}もあるいてね、森のおくのおくで、大きなかしの木が、三ばん立^たつてゐる下のおうちよ。おうちのまわりに、くるみの生垣^{いけがき}があるから、すぐわかるわ。」

赤ずきんちゃんは、こうおしえました。

おかみは、心の中でかんがえていました。

「わかい、やわらかそうな小むすめ、こいつはあぶらがのつ

て、おいしそうだ。ばあさまよりは、ずっとあじがよからう。ついでにりょうほういっしょに、ぱっくりやるくふうがかんじんだ。」

そこで、おおかみは、しばらくのあいだ、赤ずきんちゃんとならんであるきながら、道みちこう話しました。

「赤ずきんちゃん、まあ、そこらじゅうきれいに咲いている花をごらん。なんだって、ほうぼうながめてみないんだろ。な。ほら、小鳥が、あんなにいい声で歌をうたっているのに、赤ずきんちゃん、なんだかまるできいていないようだなあ。学校へいくときのよう、むやみと、せっせこ、せっせこと、あるいているんだなあ。そとは、森の中がこんなにあかるくてたのしいのに。」

そういうわけて、赤ずきんちゃんは、あおむいてみました。すると、お日さまの光が、木と木の茂った中からまれて、これが、そこでもここでも、たのしそうにダンスしていて、どの木にもどの木にも、きれいな花がいっぱい咲いているのが、目にはいりました。そこで、

「あたし、おばあさまに、げんきでいきおいのいいお花をさがして、花たばをこしらえて、もってつてあげようや。するとおばあさん、きつとおよろこびになるわ。まだ朝はやいから、だいじょうぶ、時間までに行かれるでしょう。」

と、こうおもって、ついと横道から、その中へかけだしてはいつて、森の中のいろいろの花をさがしました。そうして、ひとつ花をつむと、その先に、もっときれいなものがあるんじゃないか、という気がして、そのほうへかけて行きました。そうして、だんだん森のおくへおくへと、さそわれて行きま

した。

ところが、このあいだに、すきをねらって、おおかみは、すたこらすたこら、おばあさんのおうちへかけていきました。そして、とんとん、戸をたたきました。

「おや、どなた。」

「赤ずきんちゃんよ。お菓子とぶどう酒を、おみまいにもつて来たのよ。あけてちょうだい。」

「とっ手をおしてくれ。おばあさんはご病気でよわつていて、おきられないのだよ。」

おおかみは、とっ手をおしました。戸は、ぼんとあきました。おおかみはすぐとはいっていつて、なんにもいわず、いきなりおばあさんのねているところへ行つて、あんぐりと口に、おばあさんをのみこみました。それから、おばあさんの着物を着て、おばあさんのずきんをかぶつて、おばあさんのお床とこにごろりと寝て、カーテンを引いておきました。

赤ずきんちゃんは、でも、お花をあつめるのにむちゅうで、森じゅうかけまわっていました。そうして、もうあつめるだけあつめて、このうえ持ちきれないほどになったとき、おばあさんのことをおもいだして、またいつもの道にもどりました。おばあさんのうちへ来てみると、戸があいたままになっているので、へんだとおもいながら、中へはいりました。すると、なにかが、いつもとかわつてみえたので、

「へんだわ、どうしたのでしょうか。きょうはなんだか胸がわくわくして、きみのわるいこと。おばあさんのところへくれば、いつだってたのしいのに。」と、おもいながら、大きな声

で、

「おはようございます。」

と、よんでみました。でも、おへんじはありませんでした。そこで、お床のところへいって、カーテンをあけてみました。すると、そこにおばあさんは、横になっていましたが、ずきんをすっぽり目までさげて、なんだかいつもとようすがわっていました。

「あら、おばあさん、なんて大きなお耳。」

「おまえの声が、よくきこえるようにさ。」

「あら、おばあさん、なんて大きなおめ。」

「おまえのいるのが、よくみえるようにさ。」

「あら、おばあさん、なんて大きなおて。」

「おまえが、よくつかめるようにさ。」

「でも、おばあさん、まあ、なんてきみのわるい大きなお口だこと。」

「おまえをたべるにいいようにさ。」

こういうがはやいか、おおかみは、いきなり寢床からとびだして、かわいそうに、赤ずきんちゃんを、ただひと口に、あんぐりやってしまいました。

これで、したたかおなかをふくらませると、おおかみはまた寢床にもぐって、ながながと寢そべって休みました。やがて、ものすごい音を立てて、いびきをかきだしました。

ちょうどそのとき、かりうどがおもてを通りかかって、はてなと思つて立ちどまりました。

「ばあさんが、すごいいびきで寝ているが、へんだな。どれ、

なにかかわったことがあるんじゃないか、みてやらねばなるまい。」

そこで、中へはいつてみて、寢床のところへ行つてみますと、おおかみが横になっていました。

「ちきしょう、このばちあたりめが、とうとうみつけたぞ。ながいあいだ、きさまをさがしていたんだ。」

そこで、かりうどは、すぐと鉄砲をむけました。とたんに、ふと、ことによると、おおかみのやつ、おばあさんをそのまのんでいるのかもしれないし、まだなかで、たすかっているのかもしれないぞ、とおもいつきました。そこで鉄砲をうつことはやめにして、そのかわり、はさみをだして、ねむっているおおかみのおなかを、じよきじよき切りはじめました。ふたはさみいれると、もう赤いずきんがちらと見えました。

もうふたはさみいれると、女の子がとびだしてきて、「まあ、あたし、どんなにびっくりしたでしょう。おおかみのおなかの中の、それはくらいつたらなかったわ。」と、いいました。

やがて、おばあさんも、まだ生きていて、はいだしてききました。もう、よわつて虫の息になっていました。赤ずきんちゃんも、でも、さっそく、大きなごろた石を、えんやらえんやらはこんできて、おおかみのおなかのなかにいっぱい、つめました。やがて目がさめて、おおかみがとびだそうとしますと、石のおもひでへたばりました。

さあ、三人は大よろこびです。かりうどは、おおかみの毛皮をはいで、うちへもつてかえりました。おばあさんは、赤ずきんちゃんのもつてきたお菓子をたべて、ぶどう酒をのみ

ました。それで、すっかりげんきをと리카えしました。でも、赤ずきんちゃんは、（もうもう、二どと、森の中で横道にはいって、かけまわったりなんかやめましょう。おかあさんがいけないと、おっしゃったのですものね。）と、かんがえました。